

最後の報告パート2です。課外活動として続けてきた絵本の読み聞かせ活動の報告をします。ひとりで小学校や中学校を訪問して、日本の絵本をポルトガル語で読んで聞かせる活動をしていました。こども達は興味津々で聞いてくれるのですが、その絵本を手にとって自分で何度も読み返すということができません。オリジナルの絵本をつくって、そのコピーを子供たちに配りたい、と思っていました。

その思いが、残り任期半年になってかないました。絵を描くのが好きな3人の学生に出会えたからです。この報告で、モザンビークの昔話を2つ紹介しましたが、ここで、もうひとつ紹介します。これら3つのお話に3人の学生の絵を添えて10ページの絵本をつくりました。

3つ目のお話は、バレという娘と、マメジャというヤギのお話です。このふたつの名前は、南部では聞かない名前、北部で使われる名前だそうです。モザンビークには地方ごとにたくさんの現地語があるのですが、このお話は、きっと北部のお話なのでしょう。ちなみに、首都マプトは、南部です。絵を描いてくれたのは、漫画が大好きなハリス。

バレとマメジャ

昔、バレという名の娘がいた。バレは結婚が決まりこれから新しい生活を始めようとしていた。バレの家にはマメジャというヤギがいた。マメジャは全ての家事をこなすことができる魔法のヤギだった。



バレ: お母さん、マメジャをくれませんか。

母: だめだめ。マメジャは娘みたいなものだから。

バレ: でもお母さん、私は料理ができないの、知ってるでしょ。これがばれたら離婚されてしまう。

母: そうねえ。しかたない。でも、マメジャを外に出しちゃだめよ。だれにも見せちゃだめよ。

バレ: わかりました。

バレ: マメジャ、私といっしょに来て。

マメジャ: しかたないですね。あなたは何もできないから。

バレ: そうそう。私は毎日畑で働くから、あなたが家事をやってね。

マメジャ: はい、はい。

そのうちに、マメジャは近所の子ども達に知られるようになった。気のやさしいマメジャはみんなから好かれた。

子ども 1: わあ、ヤギだ。ヤギが働いてる。

子ども 2: ホントだ。ヤギが料理してる。

子ども 3: わあ、ヤギが歌ってる。

子ども達: ヤギさん、もっと歌って。

ある日、パーティーをすることになった。

バレ: マメジャ、明日はパーティーだから、働かないで隠れていてね。

マメジャ: はいはい。わかりました。

マメジャは言われた通り隠れていたが、そこにあったワインを飲んで、酔っ払ってしまう。

マメジャ: あら、こんなところにおいしいようなワインがある。

いただきますあす。ああ、おいしい。ゴクゴク。

・・・あ、そうだ。はたらかなくちゃ。

人々: あ、ヤギだ。ヤギが働いてる。どうなってるんだ。

夫: なんて恐ろしい！これは魔法か！銃で殺してやる！

バレ: 待って待って！殺さないで！

夫: おまえ！おまえのヤギか。なんて恐ろしい魔法を使うんだ！出ていけ！おまえの顔なんか見たくない！

バレ: わかりました。出ていきます。マメジャ、いっしょに行こう。



この10ページの絵本を持って、日本語クラブの学生達といっしょに、小学校を訪問する機会を何回か得ることができました。この絵本は、ドラマ仕立てになっているので、学生達はこれを演じて見せることができます。だから、読み聞かせではなく、ちょっとした劇の公演みたいな感じになりました。回を重ねるごとに、学生達の演技に熱がこもって、だんだん劇団みたいになってきました。子供たちが熱狂してくれるので、学生達もその気になるようでした。

絵本のお話は、モザンビークの昔話なのですが、ほとんど一般に知られていません。子供たちも全然知らないし、大人も知りません。このままでは、消えてしまうかもしれません。このようなお話を語り伝えることがなされなくなったのは、長く続いた内戦のせいかもしれません。

劇が終わって、絵本のコピーを配ると、子供達は絵本に見入っていました。絵をながめて、お話を読もうとしていました。

そんな姿を見ると、もっと多くの子供たちに絵本を届けたい、と思うのです。学生達も同じ気持ちのようでした。



私が帰国した後も、学生達がこの活動を続けられるように、他のボランティアやモザンビーク人にも協力をお願いしました。学生達もこれを続けたいと思っているので、何とか続いてくれることを願っています。